

聖書：使徒 1：1～11

説教題：主の再臨を待ちつつ

日時：2013年5月5日

今日から見る「使徒の働き」は、これまで見て来たルカの福音書の続編です。そのことは1節を見ると分かります。使徒の働き1章1節は「テオピロよ」という呼びかけから始まります。この人物の名前は、ルカの福音書冒頭にも出て来ました。ルカ1章3節に「尊敬するテオピロ殿」と。この「尊敬する～殿」という言い方は、位の高い人に使われる表現です。これから見る使徒の働きでは、ペリクスやフェストなど、ローマの高い地位にある役人に使われています。興味深いことは、ルカの福音書では「尊敬するテオピロ殿」と言われていた人が、ここでは「テオピロよ」とだけ記されていることです。このことはルカの福音書を書いた当時、テオピロはまだ求道中の人だったのに対して、使徒の働きを書く頃にはすでにクリスチャンになっていたのではないかと、だから親しい呼びかけに変わったのではないかとある人たちは推測します。もしそうだとしたら、それだけでルカが先の福音書を書いた労苦は大きく報われたことになるでしょう。

そしてこの序文で重要なことは、この使徒の働きでは何がテーマであるのか、その内容が簡潔に示されていることです。まずルカは「前の書」すなわちルカの福音書で何を書いたかを振り返っています。それは「イエスが行ない始め、教え始められたすべてのこと」である、と。すなわちルカが言っていることは、先の福音書が記したことは、イエスが行ない始め、教え始めたという、イエス様の働きのほんの始まりだけであったということです。つまりイエス様の働きはまだ終わっていない。ルカはこれから使徒の働きで、イエス様の働きの続きを書こうとしているのです！これはこれからこの書を読む私たちがしっかりと持つべき重要な視点です。天に上げられたイエス様は、天国のベッドに寝そべって暇にしておられるのではないのです。イエス様は舞台から消えたのではなく、今度は天からどのようにいよいよ力強く働いておられるか、ということが記されるのです。そしてそのように見る時、イエス様の働きは今もなお継続されていることが分かります。私たちはこの使徒の働きで、単なる過去の記録を読むのではなく、今の時代にも直結しているイエス様の天からの働きについて見るのです。

イエス様は天に上げられる日までの間、40日間、なお地上にとどまって、弟子たちの今後の働きのための準備をなされました。三つのことがここに書かれています。まず一つ目は、数多くの確かな証拠をもって、ご自分が生きていることを使徒たちに示されたということです。なぜこのことが重要なのでしょうか。それはキリストの復活は、福音の中心だからです。この復活に何が示されているのでしょうか。それは私たちの罪の解決がここにある！ということです。イエス様の十字架の贖いのみわざは成功した。従ってこの方であって罪の赦しの世界が到来している。この方において神との交わりが回復できる。そしてこの方であって永遠の命に生きる世界が開かれたということです。

二つ目にイエス様は「神の国のことを」弟子たちに語りました。「神の国」とはイエス様の宣教の内容を一言で表したものであり、神の恵みのご支配のことです。最初の間人アダムとエバは神の恵みの支配の中に生きていましたが、罪を犯した結果、人は神との正しい関係を失い、サタンの支配下に入ってしまった。ですから私たちの今の生活には多くの苦しみ、災い、嘆き、悲しみが満ちています。しかしイエス様の十字架と復活のみわざにより、私たちの罪の問題に解決が与えられ、神の恵みの支配が再び私たちの上に及ぶ道が開かれました。聖書が語る福音は、私たちはキリストによって暗やみの支配から神の恵みの支配に立ち戻れるということです。キリストを信じる者には神の恵みが取り囲み、その人は天国へ通じる神の祝福の世界に生きることができるのです。

そしてイエス様が 40 日間にされた三つ目の準備は、聖霊についての約束です。5 節でイエス様は「もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」と言われました。これを聞いた弟子たちが、この時もいかに頓珍漢であったかが、6 節に示されています。彼らはイエス様に尋ねました。「主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか。」 イエス様は「いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。」と言って、8 節で素晴らしい約束を語ります。「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」 神の国の福音は、エルサレムにとどまらず、ユダヤとサマリヤの全土、さらには地の果てにまで広められなければならない。ルカの福音書 24 章のイエス様の言葉によれば、「罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」 マタイの福音書 28 章の大宣教命令によれば、「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」 こんな途方もないビジョンをどうやって、この弟子団に遂行できるでしょうか。しかしイエス様は、聖霊が臨むことによって必ずそのことが実現されると言っています。イエス様はかつてご自身が世を去って、聖霊が遣わされる方があなたがたにとってはるかに益だと言われました。この聖霊はイエス様が天から遣わす霊です。イエス様は天に昇り、そこから聖霊を遣わすことによって、より効果的に、より力強く、ご自身の働きを進められるのです。ここに私たちがこの書を読むに当たり、しっかり心に留めるべきメッセージがあります。私たちはこれから使徒の働きを通して、地の果てまでの宣教が進んで行く様子を見ます。教会が成長し、神の国が前進する様子を見ます。しかし、使徒の働きが書いているのは、これは聖霊の指導による超自然的な神のみわざであるということです。あるいはより正確に言えば、聖霊において教会を用いつつ、天上から働かれたイエス・キリストご自身のみわざであるということです。私たちはその視点で、この書を読んで行かなければなりません。そして私たちは使徒の働きに登場する弟子たちと同じように用いられるために、どのようにキリストと聖霊に信頼し、自分自身をささげて行

くべきなのか。その大切な原理、また真理をこの書から学ぶことができるのです。

9～11節にかけて、イエス様の昇天が記されています。二つのことに注目したいと思います。一つはイエス様が天に上げられて行く時、雲に包まれて見えなくなったことについてです。「雲」はご存知の通り、聖書では神の特別な臨在と栄光を象徴するものです。モーセがシナイ山で十戒を授かった時、その山の頂には「密雲」がありました。幕屋が完成した時、あるいはソロモンが神殿を奉献した時、栄光の「雲」がその宮に満ちました。またイエス様が高い山の上で栄光の姿に変貌した時も、イエス様は「雲」に包まれました。そしてイエス様がやがて再臨される時も、「雲」に乗って来られると語られました。つまりこれはイエス様が特別な神の栄光の現れの内に天に昇って行かれたことを語っているのです。これは弟子たちの心に非常なメッセージを残すものだったでしょう。自分たちと共に地上を歩き、今、天へと昇って行かれたお方は、栄光の神ご自身であられる。その方が今や天で天地一切を治め、私たちを用いて、この世界に対する神の働きを導いてくださるのだ、と。

もう一つ注目したいのは、天使たちの言葉です。御使いたちは「なぜ天を見上げて立っているのですか。」と問います。その意味は、いつまでその状態にいるのですか？ということでしょう。あなたがたには取りかかるべきことがあるでしょう。主に命じられた課題があるでしょう。そのようにして、与えられた使命遂行にこそ心を向けるようにと促してくれたのでしょう。その際、天使たちは弟子たちへの励ましとして、こう付け加えます。「あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に昇って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

主の再臨はどういう意味で私たちにとって励ましでしょうか。ある人にとって主の再臨は励ましより、むしろ恐怖かもしれません。もし今、主の再臨が来てもいいですか、と問われたら、皆さんは何とお答えになるのでしょうか。もしかすると多くの人が、もう少し待ってください、と言うかもしれません。「主よ、来てください」ではなく、「主よ、まだ来ないでください」と聖書と違う祈りをしてしまうかもしれません。

しかし聖書は主の再臨を、私たちの励ましとして語っています。どうしてそうなるのでしょうか。それはここで天使が言っている「このイエスは」という言葉を良く考えることによって分かるかと思います。「このイエスは」と言われた時、弟子たちが思ったのは、彼らが愛するイエス様のことだったでしょう。決して自分たちを厳しくさばく、怖いさばき主ではありません。イエス様は自分たちのために命までも捨てて、救いのみわざをなし、復活し、死に勝利し、主権をもって天から一切をご支配下さる救い主です。今も栄光の雲に乗って天へ昇って行かれた麗しい主です。その方が再び来られることを考えた時、彼らを突き動かす力は恐怖よりも愛であったでしょう。この方が帰って来られた時に、少しでもこの方に喜ばれるような生き方をしたい。そこに私たちのこの方に対する感謝と愛を証しする者でありたい、と。

私たちにとっても同じでしょう。やがて来られるお方は私たちの愛する救い主です。もちろん私たちは日々、自分の不甲斐ない現実と直面することがあっても、主は私の救いを成し遂げ

てくださった方であり、素晴らしい救いをついに完成させ、そこに導き入れるために来てくださる救い主です。その主を思うなら、私たちは足りない所は絶えず悔い改め、やがて来てくださる救い主に少しでも喜ばれるように！そこに私たちの愛と感謝を証しできるように！と歩むことに心を注ぐように導かれるのではないのでしょうか。

私たちは決して主と離れ離れになり、寂しく、心細く、地上の生活を続ける者たちではありません。そうではなく、私たちは、復活して天に上り、今や全世界の支配権を持つ天上の主と共に、世界に対する神のご計画のために働く者たちです。栄光の雲に包まれて天に昇られた神なるお方が、聖霊を通し、今も私たちを用いて、みわざを進めておられます。その主はどのように天から働かれるのか、私たちは使徒の働きから学び、自分に当てはめたいと思います。そして私たちが見つめるべきゴールもこの時の弟子たちと同じです。天に上げられたこのイエスは、同じ有様でまたおいでになります。私たちの愛する主がやがて来られます。その日に喜んで主をお迎えできるように！そして主ご自身に少しでも喜ばれる自分であることができるように！それが私たちの日々の歩みの励まし、また動機付けとなるべきことなのです。